

中同研大会を終えて

3年主任 仁 木 真 之

- (1) 今回の大会とそれに向けての2年間の同和問題に取り組んだ日々で多くの事を学ぶことができた。これでやっと同和問題について話し、語る一步を踏み出すことができたのではないかという一種の満足感と、今後の自分自身のあり方こそが問われていくのだという緊張感がある。

ここまで185名の生徒と3年教師団を燃焼させたエネルギーは何だったのか。昨年の初めての学年部会において確認したのはこの大会を念頭においての、研究授業の実施とその授業記録をとること、オリエンテーションを実践していくことの2点だった。板野中学校における初年度が同和教育に対する取り組みが不十分な形に終わったことにたいする反動という部面もあった。「同和教育とは何なのか?」という知的な面における関心の寄せかたであったように思う。それが上記2点の計画の起点である。2年生という比較的緊張感の少ない学年主任としての抱負と気負いがあった。わずかに初年度に担任した2名の対象地区の生徒の思いに応えられなかったという自責の念があったものの、頭の中から生まれた意欲であったように思う。

これが全体学習という当初予期しなかった形と成果を生み、大会を越えて教師としてのあり方を問う形で今日まで実践できたのは、森口先生存在であり、常に議論し迷いながらも前を向いて進んだ学年の先生たちの存在であり、生徒の存在であった。

森口先生の同和問題にかける情熱一執念—はまず生徒の心を動かせる。形ばかりに終始しそうになった全体学習に魂をいれたのは森口先生の「怒り」であっただろう。全体授業においてK子が涙を見せた。これがそれまでの同和問題学習を質的に大きく変換させていくきっかけになっていく。今も、これまでの取り組みを振り返るときこの全体授業を挙げる生徒が多い。生徒がゆれだした。建前に始まり建前に終わっていた生徒の発言に本音が入るようになっていく。それが教師をゆり動かすことになっていく。今年度になって火が付いたようになった。佐野先生が「私は1年間先生達と一緒に仕事したがそれによっては変わらなかった。生徒の一言で目のウロコが落ちるような思いになった。あの生徒の言葉が私を変えた。」という。私の思いもそれに変わることはない。自分の本音をせつせつと生徒に語りかけていった先生がいた。それによって貫かれるような衝撃を受け、立ち上がろうとする生徒。その生徒によって自分をみつめ苦しい思いの中から頑張った先生たち。私たちはこのような互いが互いを支え磨き



合うような関係の中で変わってきたし、これからも変わっていききたいと思う。

教師の同和教育観が確立して初めて同和教育ができていくのではない。同和教育観を確立していくために子供と共に——中心となる同僚の助けを受けながら——苦しみ、迷い、悩みながらも進んでいく、実践していくのだということが初めてわかってきた。自分が変わってないから、同和教育について勉強ができてないからと言い逃れをし逃げていたような気がする。（考えてみれば今までの考えの甘かったこと。言い訳のできる中ばかりにいた。）

これまで使っていた言葉の意味を問い直し、同和教育を考えていく上での本来の意味、実践を伴い、実践の裏付けを持って考えていこうとすることができるようになったように思う。例えば「子供に学ぶ」ということの意味。それはまず子供が本音を語ることでできるような授業を成立させ（これがまず第一条件）、子供が突き付ける言葉を自分のものとして捕らえ、この苦しみを知ろうともがき、自分の本音の部分をみつめることなくしてはつかみえない。「先生はどうなのか」という生徒の問いかけにどこまで真剣に応えようとするかによって「子供に学ぶ」姿勢は違って来る。学ぶ、とは何かを教わることでない。どこまでその思いを共有できるかということである。そのことが初めてわかってきた。「学ぶとは誠を胸に刻むこと。教えるとは共に希望を語ること」という教師なら誰でも耳にしたことのある言葉の意味が初めて実感としてつかむことができつつあるように思う。同和教育こそまさに「共に希望を語る」ものでなくてはならない。

言葉の問題は単なる「言葉」の問題ではなく思想の問題であり、実践を映す鏡であるような気がする。

「先生、私せこい…」と言った後藤田先生。奥さんと共に石原先生のところに勉強に行ったという阿部先生。そして、ある意味で我々をリードしてくれた佐野先生。よき同僚の中で自分の思い、考えをぶつけ合うことによってここまで来ることができた。この子たちの同窓会にはいつであっても胸をはって出席できるようにしていきたい、そう考えている。

- (2) 大会はそれなりの緊張は伴うもののむしろ郡大会の時のほうが事前の取り組みは強かった。それだけ今回の大会が日常活動の一部となっていたことの証であると考えている。自然体に近い形で大会を迎えすべてのクラスがいままでで最高の授業になった。私のクラスは地区の生徒に弱い点がある。今までの同和教育学習に取り組む姿勢の弱さの表れであり卒業までの課題として残された。それでも子供たちは精一杯の授業を展開してくれたと思っている。どのクラスも「見せるための授業」、言い替えれば「フリをした授業」でなかったこと。「考えるフリ」、「悩むフリ」でなくあれだけの大勢の人の中で自分の問題として真剣に必至で考えることのできる子供たちの強さに教えられることが多い。自分が地区出身であることをなげなく発言することのできていく生徒。この子たちが高校に進学し、あるいは社会にでたとき今の気持ちをどこまで持ち続けていくことができるのか。それは私たちの問題でもある。この大会で終わりではなくまさにこれからが正念場であるという思いを強くしている。

私のクラスにおける一つの成果は西小学校出身の生徒の変容がある。初めて涙を見せたのは西の子供たちであった。同和教育に対する偏見の中で自分の本音に向き合うことの少なかった彼らが差別の温存や自分の差別心は今隣にいる友達を差別することになるという、現在の自分自身の問題として考

えるようになった。それでもまだまだ部落差別一般についての偏見は存在する。本音を掘り起こし掘り起こしそれを越えようとする授業を卒業まで続けたいと思う。

大会そのものは今は板野中学校のできる最高の形を示すことができただろう。それだけに学校としてもそれからが勝負であるという共通理解のもとで日常生活に根ざした同和教育を実践しつづけなければならない。そうでなければ今までのことがウソになる。

大会の形の面からいえば、多くの人に今までの取り組みを聞いてもらえる時間が欲しかった。その点ではやや不満の残るものとなった。

大会は取り組みの初めの段階においては目標であったが、今は一つの通過点に過ぎないという感じを持っている。そういう感想を持てたことがうれしい。

- (3) 昨年の実践をまとめた。それは当初の予定ではあったがまとめてみて初めてわかったことがある。当たり前のことであるがまとめることによって初めて弱点が見え、次年度はそれを越えようとする意欲を持つことができた。「峠を越えて」は私たちの2年生時の実践記録であると同時に、本年度へのバネになっていった。また、記録に残そうということで、残すにたりの実践をするのだという全員の暗黙の共通した意志があった。当然のことであるがウソはかけないものである。いい記録を残すためによい実践を心がけるということは一見本末転倒に思える。しかし、それでもよかった。取り組む中から多くのものが見えて来る。それを大事にし自分のものとするそこそが重要である。そのような意味も込めて私たちの連帯と同和教育への情熱の証として今年度も実践をまとめてみたいと考えている。

(4) 反省点

以上は、私自身のプラスになった点を挙げてきたが不安や反省点も多い。以下思い付くままに挙げてみたい。

- 生徒についていえば大会後や授業後の感想の形がどの生徒も非常に似通ったものになっていることが気になっている。どう表現していいかわからないし、またそのことをどう評価してよいのかわからないのだが。かつて学生のころそのようなことがあったことを思い出している。多くの異なる段階の感想や反省がかみあうことによってより大きな盛り上がりや発展があるのではないかと思う。その点についてはさらに考えていきたい。
- 3年団の核となったのは森口先生の実在である。その先生と周りの先生とのあり方について考えていくことはこれからの板野中学校において同和問題学習を進めていく上で重要なことのように思う。さらにいえば、森口先生という一人の人格によって啓発させられたこの取り組みをより普遍的なものにしていく為の取り組みを考える必要があるということである。すべての教師が同じ姿勢で取り組まねばならないが、現実には差がある。生徒の中に丸岡さんを見つける働きかけを学習会の中に求めることが一つの方法と思うがさらに考えたい。
- 全校的な取り組みとして継続させていくこと。その方法について考える必要がある。同和教育は特別な教育ではない。日常的で継続的な教育活動である。むしろ教科教育のほうが特別と考えてよいように思う。このことを基本においての全校的な取り組みを考える必要がある。

第21回徳島県中学校同和教育研究大会を終えて

3年B組担任 森 口 健 司

「みんなにとって水平社宣言讃歌の学習とは何であったか。」ただそれだけの問いかけであった。生徒一人一人はかつての自分、今の自分をこの宣言讃歌に寄せて語っていく。一人の思いに他の生徒の思いが重ねられていく。一人の生徒の願いが他の生徒の願いとなっていく。一人の生徒の勇気が他の生徒の勇気を生んでいく。まさしく共感と連帯の絆に結ばれた50分間であった。

同和教育の本質について語る生徒の姿、同和問題学習に取り組む教師の姿勢を問いただす生徒の姿、そして、かつて自分が受けてきた同和問題学習が、自分をより惨めな人間と認識させていったと指摘し、同和問題学習のあるべき姿を語っていく対象地区生徒の姿。そんな生徒の姿を参会の先生方はどのように見つめていたのだろうか。何を感じどのように生徒の言葉を受け止めてくれたのだろうか。できるだけ多くの先生方より感想をいただきたい。

体育館での全体学習で磨かれてきた生徒にとって教室での授業ではスペースがなさ過ぎる。もっともっと多くの先生方に自分たちの心の叫びを聞いてほしかったと思う。授業はさまざまな角度からビデオに収められている。できるだけ多くの先生方にこの授業のビデオを見ていただきたい。そして生徒の思いをどう受け止められたかを聞かせてほしい。それがあの緊張間の中で必死に自分をさらけ出し、必死に自分の生き方を訴えた生徒を支えることであり、励ましていくことにつながっていくと思う。

多くの反響を期待しながら、県中同研大会に寄せる生徒の思いがいっぱいつまった大会前日と当日の生活ノートを紹介する。

